

「JICA 開発大学院連携推進プログラム」が始まっている。そのねらいとは。文・松井 健太郎

特定の技術だけでなく、日本の近代化や途上国の開発協力の経験を教える

**日本の協力大学とともに
二つのプログラムを実施**

JICA 開発大学院連携構想は、途上国の未来と発展を支えるリーダーとなる人材を日本に招き、欧米とは異なる日本の近代の開発や発展と、戦後の途上国支援の実施国としての知見などを学ぶ場を提供しようとするものだ。JICA はこの構想に賛同する大学の協力を得て、2018年10月に具体的な活動を開始した。JICA の協力で、日本の修士・博士課程で学ぶ留学生ら（以下、JICA 留学生）に二つの JICA 開発大学院連携プログラムを提供している。

一つは、途上国の発展を考えたために明治維新から始まる日本の近代化や高度経済成長、開発の歴史を学ぶ「日本理解プログラム（共通プログラム）」だ。全国各地で学ぶ JICA 留学生が東京・六本木にある政策研究大学院大学に集い、五日間にわたり集中講義を受けるとともに、日本の経験を母

成功も教訓も 日本の経験を留学生へ

特定の技術だけでなく、日本の近代化や途上国の開発協力の経験を教える

「JICA 開発大学院連携推進プログラム」が始まっている。そのねらいとは。

文・松井 健太郎

日本の経験が
問題解決の
きっかけになるはず



JICA 国内事業部 JICA 開発大学院連携推進室 室長 紺屋健一(こんや・けんいち)さん

1996年に国際協力事業団(現JICA)入団。企画部SDGs推進班参事役、政策研究大学院大学教授・参与等を経て現職。

**自国の発展に取り組み
次世代のリーダーを育成**

JICA 開発大学院連携推進室室長の紺屋健一さんは、「日本の近代化の歴史は、途上国でそのまま適用できるものばかりではありません。当時日本は世界と対等に渡り合い、生き残っていったにどうあるべきかを必死で考えていました。そして海外の取り組みを調べ、よいものを貪欲に取り入れていきました。単に日本の歴史について知識を得るのではなく、そうした過程を学んでほしいのです」と話す。また各大学におけるプログラムにおいても、「自分に必要な特定の技術だけを学んで帰国するのではなく、長期的な視点を持って政策立案を実行し、自国の発展に取り組むリーダーになっ

紺屋さんは JICA 留学生の活躍に期待を寄せる。

現在、連携構想の趣旨に賛同して覚書を交わした大学は84校。うち21校で28の「各大学におけるプログラム」を実施中だ。18年度は JICA 留学生として721人が、19年度は692人が来日した。開講5年目となる22年度には、日本に2000人を超える JICA 留学生が滞在し、日本の経験を学べるよう環境を整えている。

日本について学ぶ意義

●各大学におけるプログラム



JICAの留学生が、それぞれの専門分野について、協力大学の研究科の学位課程のなかで日本人学生とともに学ぶ。

●日本理解プログラム



JICAの留学生が、日本の近・現代の発展と開発の歴史を集中講義形式で学ぶ。

プログラムの現場から



カンボジア民間航空局 プー・ポリネルさん

「SDGs グローバルリーダー・コース*」で来日。

*アジア、大洋州、中南米、アフリカ諸国の行政官等が、日本の大学院の博士・修士課程で学び、学位取得を目指す長期研修プログラム。

熱い議論を行い 多様な視点で日本を学ぶ

日本理解プログラムのワークショップでは、日本の保育園の待機児童問題や日本人の働き方などもテーマになりました。インドの留学生からは「なぜ日本には汚職がないのですか?」といった率直な質問も飛び出すなど、侃々諤々の議論が繰り広げられます。多様な視点で日本を学び、自国のために役立ててほしいです。



日本理解プログラム
担当講師

民間航空局の次官として 公共政策の立案に携わっています

日本理解プログラム(共通プログラム)では、セミナーや会議での講演者や優秀な先生方との出会いを通して多くのことを学びました。帰国後、私はカンボジアの航空輸送産業を規制する機関である民間航空局の次官を務めています。公共部門のリーダーの役割は、政策を通じて人々の生活を安全で豊かにすること。そのためには、エビデンスに基づいた政策立案プロセス、とくに政策や影響評価についての明確で深い理解が必要です。このプロセスを理解することが、人々のための公共政策の立案に重要な要素になることも日本で学びました。



各大学におけるプログラムでは日本と海外の学生がともに英語で授業を受ける。2019年4月、JICA北岡伸一理事長は東京大学の公共政策学の学生に、日本の近代化とODA政策に関する特別講義を行った。

自国と日本を比較し 問題解決の方策を探求

各大学におけるプログラムも学生の関心は高く、廃棄物問題や上下水道問題など自国と日本の状況を比較しながら、問題解決のための方策を探していました。各授業とも活発な質疑がなされ、授業時間を過ぎることもしばしば。学生たちの発表もバラエティに富み、海外経験の多い教員も新たな知識を得ることができました。



各大学における
プログラム
担当講師

●日本との友好関係



帰国後、JICA事業への継続的な関与や、日本で行われる国際会議に出席するなど、日本との架け橋となって活躍することが期待される。

●自国の発展



日本で学んだ知識や技術、課題解決の方法を、帰国後は自国の課題の解決のために応用。地域や国のリーダーとなって実践する。